第26号

さいたま 来ぶらり通信

さいたま市図書館報　2014年11月15日発行

Contents

わがまちSai発見……1,2
ハロー！来・ぶ・ら・り　大宮図書館　無声映画……4
本棚ぶらり　大人も楽しめる絵本の世界……3

わがまち Sai発見

さいたま市 de ミステリー 第2弾

さいたま市が舞台の推理小説

踊り子号が爆破され、青函トンネルを走る北斗星５号にも爆破予告が。仕掛けられた爆弾の謎を追って警視庁刑事部捜査一課の十津川省三がＪＲ大宮工場へ――西村京太郎の『寝台特急「北斗星」殺人事件』（光文社　1988年）では、トリックの鍵を握る重要な舞台として大宮駅が登場します。このほかにも、さいたま市は多くのミステリーの舞台になっています。その一部は「さいたま来ぶらり通信」第12号（2010年４月１日発行）でもご紹介しましたが、今号はその続編です。（出版年は最初に刊行された年。その後文庫化などで再刊されている資料もあります。）

「RAIL　WARS!」1～9（以下続刊）
豊田巧著　創元社　2012～

舞台は、「國鉄」が分割民営化されずに存続している日本。鉄道高校に通う高山直人は、就職活動の一環で鉄道公安隊へ研修に行くことになり、午前７時39分大宮駅発の京浜東北線で東京駅まで通います。「國鉄」の独立した警察組織である鉄道公安隊第４警戒班と「國鉄」の分割民営化を目論むテロ集団との戦いがくりひろげられます。最初の事件は京浜東北線となすの号のダイヤグラムを利用したもので、通称大宮事件と呼ばれています。

ボンネット型特急や気動車などの旧国鉄型車両が現役で活躍していたり、高崎線が東京駅まで乗り入れしていたり、万世橋に交通博物館が存続しているなど、現実とは異なる設定もあります。貨物時刻表を利用した暗号や廃線トリックなど鉄道ミステリーとしても楽しめるライトノベルです。

希望のまちの殺し屋たち
加藤眞男著　講談社　2014

大宮駅19時30分発の寝台特急北斗星での不倫密会から物語が始まります。大宮区高鼻町に住む建築士の田辺郁夫、大宮駅前のデパートに勤める鈴木佐恵子、浦和区の県立高校に通う樋口友也と三井愛美を中心としたミステリーです。さいたま市に暮らす平凡な市民が殺意を抱き、３つの犯行計画が絡み合っていきます。

天文台のある県立女子高校や、さいたま新都心駅前のシネマコンプレックスなどが登場する他に、鈴木佐恵子が氷川参道沿いにある図書館の２階でインターネット端末を利用する場面もあります。タイトルはさいたま市の歌「希望のまち」に由来するのでしょうか。

「私は一縷の望みで図書館に行ってみた。確か図書館にはパソコンがあってネットも利用できたはずだ。歩いていける距離に大宮図書館がある。(…)私は二階の公開図書室でパソコンに向かった。」
『希望のまちの殺し屋たち』p.56 より

追憶の殺意
中町信著　東京創元社　2013

岩槻市の武蔵教習所の配車係が死亡します。岩槻警察署の寺内君彦警部と、岩槻の昼行燈の異名をとる中畔善太警部補が捜査を開始しますが、同じ教習所の主任と指導員が連続して殺害されてしまいます。

密室殺人事件にアリバイ破りをプラスした時刻表ミステリーで、江戸川乱歩賞の最終候補作品である**『自動車教習所殺人事件』**（徳間書店　1988）の改題です。

名もなき毒
宮部みゆき　幻冬舎　2006

杉村三郎が主人公のシリーズ第２作。日本を代表するグループ企業会長の娘と結婚し社内報編集者となった杉村ですが、社内でトラブルを起こした女性従業員の言動に悩まされます。そのようなときに世間では連続無差別毒殺事件がおき、そのうちの２件がさいたま市内で発生します。やがて杉村は、思わぬ形で殺人事件に関わることに……

人の命を奪う毒物、感情をコントロールできずに周囲に悪意という毒物を振りまき続ける犯人――杉村が心ならずも暴き出すのは、誰もが偶然かつ理不尽に遭遇するかもしれない毒なのかもしれません。

このシリーズは昭和名曲歌謡シリーズとも言われ、『名もなき毒』には古賀政男作曲の「丘を越えて」が作中のテーマのように使用されています。

ストロベリーナイト
誉田哲也著　光文社　2006

都立公園の近くで斬殺死体が発見され、警視庁捜査一課殺人犯捜査係主任の姫川玲子は、死体の状況からこれが連続殺人であることを見抜きます。若き警部補玲子は南浦和在住ですが、事件が起きるとホテル住まいで現場に通います。これは、玲子が過去に被害者となった事件の影響によるものです。

個性的な女性刑事を主人公とした警察小説のシリーズ第１作です。第３作目にあたる連作短編集**『シンメトリー』**（光文社　2008）では、玲子が警部補になる前の思い出も語られ、玲子が旧浦和市の高校出身だとわかります。

北の街物語　内田康夫著　中央公論新社　2013
記憶の中の殺人　内田康夫著　講談社　1995

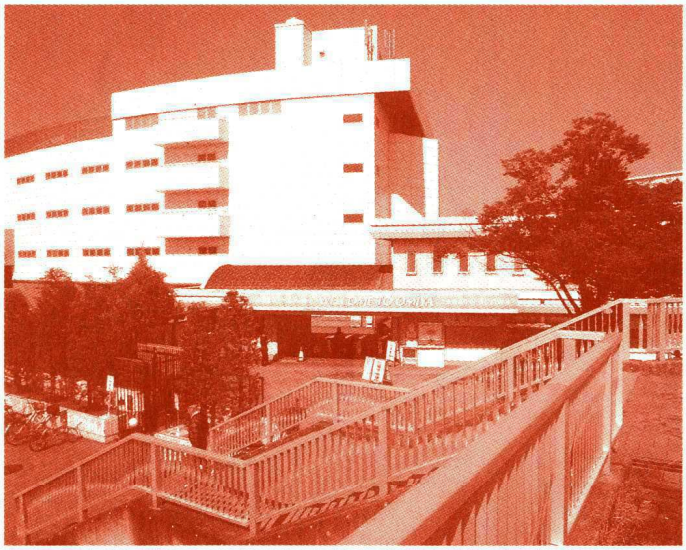
浅見光彦が主人公のシリーズ。浅見光彦は、民間人でありながら、警察機構のトップに兄・陽一郎（大宮市の警察署長を務めていたこともあります）がおり、事件の関与や捜査に対して特権ともいえる切り札を持っている人物です。熱心なファンのことをアサミストと呼び、公式ファンクラブやクラブハウスが存在するというから驚きです。

妖精のブロンズ像の謎に挑む『北の街物語』は、殺人事件が起きないミステリーです。浅見家のある東京都北区を中心に物語が進みますが、ヒロイン大下真美が浦和の旧家の出身で、「大宮ケイリン」の風景が事件を解く鍵になります。

浅見光彦自身の言葉で語られる『記憶の中の殺人』は軽井沢の避暑地が舞台ですが、さいたま市ゆかりの児童文学者である石井桃子さんの作品『ノンちゃん雲にのる』が重要なモチーフになっています。

浅見光彦シリーズには、さいたま市が登場する事件がほかにもあります。**『鳥取雛送り殺人事件』**（中央公論社 1991）では桟俵の謎に挑んで岩槻市役所を訪れています。北原白秋の詩集の謎に挑む**『浅見光彦殺人事件』**（角川書店　1991）のヒロイン寺沢詩織の伯父夫婦は浦和に住んでいて、犬乗り童子の謎に挑む**『朝日殺人事件』**（講談社　1995）の犯人は大宮市内のマンションに住んでいました。

フルトヴェングラーの楽譜の謎に挑む**『遺譜』**（上・下　KADOKAWA 2014）には、副題に「浅見光彦最後の事件」とあり、冒頭には、「この作品を浅見光彦を愛したヒロインたちに捧げる」と記されています。浅見光彦は今後、本当に探偵業から足を洗うのか、そして誰と結ばれるのか、アサミストでなくても大いに気になるところです。



「大宮公園陸上競技場兼双輪場は、その正式名称のゆえんどおり大宮公園の中にある。（…）スタジアムの外観は白亜の殿堂と呼べるように美しい。正面入口の上に「WELCOME　TO　OMIYA」と掲げられているのが、何となく面はゆい。（…）すでにレースは始まっていて、藤田は席を温めるひまも惜しむように「車券を買いに行こう」と浅見を急かした。」『北の街物語』p.274 より
浅見光彦たちは東入場門から入ったようです。